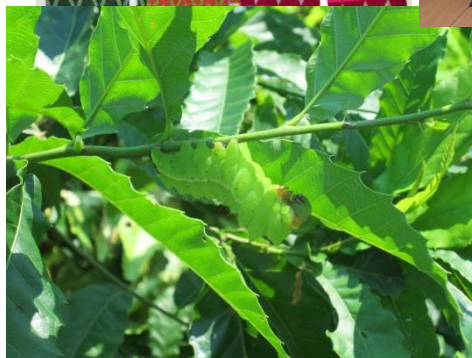
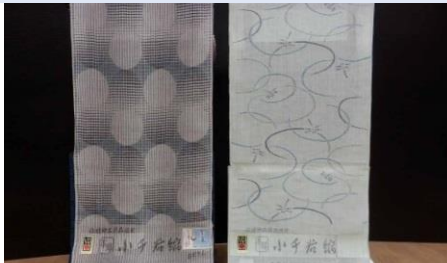


シルクのまちづくり市区町村協議会 特産品紹介パンフレット



鶴岡シルク(つるおかシルク)

●「侍」発祥のシルク。新しい素材感の「kibiso」を北限のシルク産地から発信します。

歴史

鶴岡シルクの歴史は、明治初期、それまで刀を差していた武士たちが、刀を鍬に持ち替えて自ら原野を開拓し、桑畑を作り養蚕を始めたことに由来します。やがて鶴岡は絹織物の一大産地となり、20世紀前半には盛んに欧米に輸出されていました。現在、私たちは日本に絹産地を残していくため、kibisoを中心とした新しい取り組みを行っています。

特徴

鶴岡を含む庄内地域は、養蚕にはじまり絹織物の製品化まで、一貫した工程が集約されている日本で唯一の地域です。

その特徴を活かし、地域のオリジナルブランド「kibiso」を展開しています。蚕が繭を作る際に最初に吐き出す糸「きびそ」は、太くて硬いため繊維として生糸に使われることがほとんどありませんでした。しかし、保湿力に優れている上に紫外線吸収力や抗酸化作用がある優れたもので、その独特の風合いを活かした製品づくりを行っています。

問合せ先

鶴岡織物工業協同組合

〒997-0017山形県鶴岡市大宝寺字日本国223-5

電話 0235-22-0507 / FAX 0235-22-0507

URL <http://tsuruori.sakura.ne.jp/>

鶴岡シルク株式会社

〒997-0017山形県鶴岡市大宝寺字日本国223-5

電話 0235-29-1607 / FAX 0235-29-1608

URL <https://www.t-silk.co.jp/>



長井紬(ながいつむぎ)

●縦糸は生糸、横糸は真綿から紡いだ糸で生産する、伝統工芸品としても指定されている紬

歴史

長井紬は、天正年間から養蚕の盛んだったこの地に、今から約230年前に上杉鷹山公が産業振興策として、越後から織物の技術を導入したのが始まりとされています。

当時は農家の副業として広まり、その後、緯総緋(よこそうがすり)と併用緋(へいようがすり)という長井紬独特の技法が生まれ、現在まで守り継がれています。

昭和51年には、長井紬を含む置賜地方で生産されている置賜紬が伝統工芸品に指定されています。

特徴

伝統を継承し、先染めした縦糸と横糸の柄を一本一本合わせて織る「緯総緋」と「縦緯併用緋」などを製造し、着れば着るほどに体になじむ丈夫な品質で広く愛用されるようになりました。

長井紬で作った名刺入れや、着物を作るあまり生地で作ったしおり・小物なども人気の商品です。

問合せ先
長井市商工観光課
〒993-8601山形県長井市ままの上5番1号
電話 0238-84-2111(代表)
FAX 0238-87-5914



白鷹お召(しらたかおめし)

- 緯糸に強撚のお召糸を使い、布面に大きな皺がある織物。一般のお召しよりも皺が大きいいため、肌触り、着心地がよく、しわになりにくいのが特徴。

歴史

白鷹と絹織物の関係は古く、和銅年間(706年)頃から養蚕が盛んに行われ、慶長6年(1601年)には町内に紺屋もあったとされている。さらに、およそ300年前には、貧窮した米沢藩の財政再建に立ち上がった藩主の上杉鷹山公によって地場産業が奨励されたことを受け、養蚕に加え製糸や織物にも取り組み、町の主力産業として定着した。当時、良質な絹のほとんどは上納品や売買の対象であり、庶民は屑繭や玉繭などから糸を紡いで紺を織って普段着として着ていた。これが今日の白鷹紬の源流となった。

特徴

「白鷹お召」には、一般のお召しよりも大きい鬼皺(おにしぼ)とよばれる皺があり、優しい肌触りと着心地で、紋様や鬼皺の独特の風合いが特徴。工程は、まず生糸に下撚りをかけて精練し染色。これがお召糸で、反物の緯糸として使用する。一般のお召は撚糸を交互に織るが、白鷹お召はさらにその間に紺糸が入り、緻密な紋様が浮かび上がる。紺糸は、全国でここだけに残る板締め技法により染められ、工芸的価値の高さから、白鷹紬は昭和51(1976)年に国の伝統的工芸品指定を、平成19年には「板締小紺」が県の無形文化財指定を受けている。



問合せ先

米琉織物工業協同組合

(代表 株式会社 白たか織)

〒992-0831

山形県西置賜郡白鷹町大字荒砥乙1202番地3

電話 0238-85-2238

山形県白鷹町

紅花染(べにばなぞめ)

●紅花生産量日本一である「日本の紅(あか)をつくる町 白鷹町」で織り上げられた紅花染めの紬はほんのりとした紅色で、清楚で気品に満ちている。

歴史

山形の紅花(紅餅)は上方商人などの活躍により全国に名を馳せ、その価値は「米の百倍・金の十倍」という貴重品で、草木染にも使われていた。江戸時代に全国有数の産地として知られた山形県の中でも白鷹は主産地であった。白鷹紅花は最上川を下り、北前船にゆられて京の都へ運ばれ、鮮やかで艶やかな紅や衣装として時代を彩った。

特徴

紅花染めは自然の草木を染料として使う草木染めのうちでも花を使用する珍しい染め。紅花に含まれる色素のうち99%は黄色で赤はわずか1%。この希少な赤の天然色素を抽出した液で糸を染め織る紬で、古来の技法をそのままに伝えている。紅花は6月末から7月初めに黄色い花を咲かせるが、黄・朱・桃・紅、そして高尚な色とされる深紅(もみ)まで染め分けることができる。目的の色彩や濃度まで染め上げるまでに反復染めをするが、化学染料では出し得ない独特の色相に染まる。

問合せ先

小松織物工房

〒992-0821

山形県西置賜郡白鷹町大字十王
2200番地

電話/FAX 0238-85-2032



白鷹天蚕紬(しろたかてんさんつむぎ)

- 経糸・緯糸ともに天蚕生糸であり、繭の飼育から織り・仕上げまで一貫して町内で行っている100%白鷹産の天蚕織物。

歴史

古くから養蚕が盛んであった白鷹町。平成元年より、深山地区で20aの圃場にクヌギを植え天蚕を飼育している。自然環境での飼育が難しく、希少な天蚕を鳥獣から守り良質な繭にするための管理には労力を要するが、元養蚕農家や織物職人などで「しらたか天蚕の会」を組織し、研究を重ね、繭の飼育から操糸、織りまでを一貫して行っている。

特徴

淡い緑色をした天蚕は、1つの繭からとれる生糸は6割程度で、1反を織り上げるには家蚕の倍の繭が必要であり、量産ができない貴重な織物である。また、糸の毛羽立ちにより織りにも時間がかかり熟練の技を要するが、経糸、緯糸とも天蚕生糸を使用し、自然な淡緑色の光沢を放つ。羽毛をまとったようにしなやかで軽い着心地で丈夫であり、自然の中で育まれた素材ならではの優しさがある。



問合せ先

しらたか天蚕の会事務局
(白鷹町役場産業振興課内)

〒992-0821

山形県西置賜郡白鷹町大字荒砥甲833番地

電話/FAX 0238-85-6126

川俣シルク(かわまたしるく)

●純白の輝きと光沢を持ち、薄さと軽さが特徴の絹です。

歴史

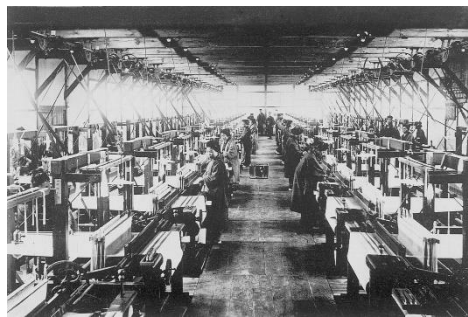
川俣町の養蚕・絹織物は、今から約1400年前に崇峻天皇の妃であった小手姫が、蘇我馬子に故郷大和を追われた皇子を探し求めて川俣町に辿り着き、桑を植え養蚕を行い、糸を紡ぎ機織りの技術を伝えたことが始まりといわれています。

江戸時代には生糸市・羽二重市が定期的に立ち、その後明治時代から昭和前期にかけて川俣は全国有数の絹織物産地に発展し、輸出花形商品の川俣軽目羽二重を織り出しました。

特徴

純白の輝きと光沢を持ち、薄さと軽さが特徴の川俣シルクは、伝統的な川俣軽目羽二重の技術を活かしつつ新たな商品開発に取り組んできました。そして、世界一薄い先染織物「妖精の羽(フェアリーフェザー)」の開発に成功し、2012年ものづくり日本大賞内閣総理大臣賞を受賞しました。

また、有名デザイナーとのコラボレーションや、平成25年度NHK大河ドラマ「八重の桜」において衣装に川俣シルクが使われるなど、現在も注目を集めています。



問合せ先

福島県織物同業会

〒960-1406

福島県伊達郡川俣町大字鶴沢字馬場6番地の3

電話 024-565-3241 / FAX 024-565-3241

本場結城紬(ほんばゆうきつむぎ)

- 繭を広げて真綿にし、手をつむいだ糸を原料とする結城紬。世界でただひとつ、結城紬だけに見られるのが最大の特徴です。

歴史

結城紬の歴史は古く、その原型は奈良時代に常陸国から朝廷に献上されていた「紵(あしぎぬ)」と言われ、その後、常陸紬と呼ばれるようになり、室町時代には「結城紬」の名で幕府や関東管領に献上され、全国的に著名な物産となりました。江戸時代には、当時の百科事典である「和漢三才図会」に最上の紬として結城紬が紹介され、江戸時代初期に信州上田より染色法と縞織りの技術が導入され、大正期以降に緻密な縞模様が生み出されるようになり発展しました。

特徴

本場結城紬は、軽くて、暖かく、心地良いシルク100%の布です。他に類のない、本場結城紬のこの柔らかな風合いの秘密は、その原料となる真綿と、真綿から手をつむぐ撚りのない手紬糸にあります。繭から直接何本かを撚り合わせて空気を排斥してつくる絹糸とは異なりこの手つむぎ糸は空気をたくさん含んでおり、希少な絹の素材であるのが特徴です。



問合せ先

結城市役所産業経済部産業振興課
〒307-8501茨城県結城市大字結城1447番地
電話 0296-32-1111 / FAX 0296-32-7123
URL <http://www.city.yuki.lg.jp/>

足利銘仙(あしかがめいせん)

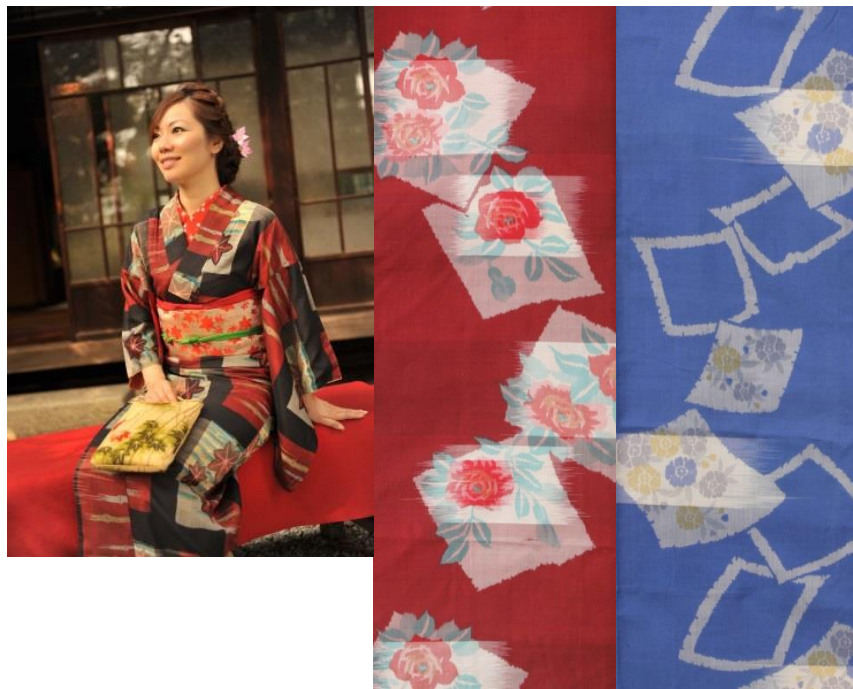
●女性の気軽なおしゃれ着として大正から昭和にかけて全国に普及した絹織物です

歴史

足利市の繊維の歴史を顧みると、奈良時代に朝廷へ絹織物を献上した事や平安時代に東大寺へ織物を納めた記録があります。大正・昭和初期にかけては、気軽なおしゃれ着物として当時大流行した「足利銘仙」で隆盛を極めました。昭和10年頃には銘仙の生産高で全国1位の称号を得ています。近年足利銘仙の生産はほぼ途絶えてしまった状況にありましたが、現在はその復活に向けた取り組みが繊維事業者を中心に行われています。

特徴

銘仙とは先染め・平織りの絹織物のことを言います。タテ糸に仮のヨコ糸を打ち込み、型で捺染して柄を染めた後、仮のヨコ糸を解しながら本ヨコ糸を打ち込む「解し(解し織)」と呼ばれる技法で作られます。あらかじめ染めたタテ糸の柄がヨコ糸を打ち込む際にズれるため、柄がかすれて風合いのある織物ができあがります。銘仙の産地は関東圏内に複数存在しますが、その中でも足利銘仙の特徴は「鮮明な色柄とデザインの斬新さ」です。また、ヨコ糸を斜にして打ち込む「半併用」「解し」に一手間加える技法)の発明もそのひとつです。



問合せ先

足利市産業観光部商工振興課

〒326-8601 栃木県足利市本城三丁目2145

電話 0284-20-2157 / FAX 0284-20-2155

URL

<http://www.city.ashikaga.tochigi.jp/soshiki/a44/>

本場結城紬(ほんばゆうきつむぎ)

- 日本最古の技法を守り、すべて手作業による工程を経て作られる、軽くて温かな絹織物

歴史

小山市の東部、鬼怒川に面した農村は、かつて桑村、絹村と呼ばれ、古くから養蚕の盛んな地域であり、その副産物として紬が織られるようになりまし。無地で織られていたものが江戸時代に縞織り、さらに高度な緞織りの技術が取り入れられ、高級織物として名声を博します。明治初期には縮織も行なわれ、男物中心から、女性の単衣に進出し、昭和初期から中期にかけて生産が増大しました。昭和31年、結城紬の平織が重要無形文化財に指定され、平成22年11月16日、「結城紬」はユネスコ(国際連合教育科学文化機関)の無形文化遺産保護条約に基づく「人類の無形文化遺産の代表的な一覧表」に記載(登録)されました。

特徴

本場結城紬は、20以上の工程をすべて手作業で作られます。日本全国の紬の中で経(たて)糸、緯(よこ)糸とも真綿から糸を手でつむいだ、手つむぎ糸を使用するのは本場結城紬だけであり、またその手つむぎ糸を使用することで、大変軽くて温かい織物となります。

問合せ先

小山市経済部工業振興課

〒323-8686 栃木県小山市中央町1-1-1

電話 0285-22-9397 / FAX 0285-22-9685

URL <http://www.city.oyama.tochigi.jp/>



富岡シルク(とみおかシルく)

●富岡市内の養蚕農家によって丹精込めて生産された繭を100%使用しシルクの繊細な光沢と光のような美しいグラデーションを表現した商品。

歴史

かつて世界中の人々を魅了した美しい日本のシルク。その礎となったのは、明治5年、富岡の地に日本の近代化の象徴として創建された富岡製糸場でした。

西洋の技と日本の心をひとつにし、高品質な生糸を生産し、世界中に輸出されました。全国から集まった工女たちの繰糸技術は日本各地に広まり、日本の蚕糸絹業の発展に貢献しました。

富岡製糸場が世界文化遺産に登録された今日、富岡の地には今もなお12戸の養蚕農家が存在し、新たに地域養蚕、企業養蚕も始まり、群馬県の繭生産は32年ぶりに増産となりました。

今後も川上から川下までの連携により、JAPANシルク復興の牽引を目指します。

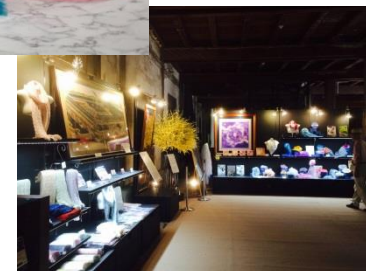
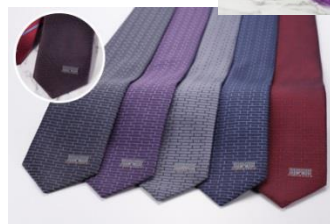
特徴

「富岡シルクネクタイ」

富岡製糸場のフランス積み煉瓦をモチーフに、富岡産の極細繊維度生糸100%を使用した上品な光沢が美しいオリジナルネクタイです。

「富岡シルクオーガングーストール」

“風を纏う・光を纏う”をコンセプトに、絹本来のしなやかさと艶やかさを追求し、美しい色調と流れるようなグラデーションで華やかな装いを演出します。手洗いでできるイージーケア商品です。



問合せ先

富岡市世界遺産部富岡製糸場戦略課

〒370-2316

群馬県富岡市富岡1-1

電話 0274-64-0005 / FAX 0274-64-3181

URL <http://www.tomioka-silkbrand.jp/index.html>

東京手描友禅(とうきょうてがきゆうぜん)

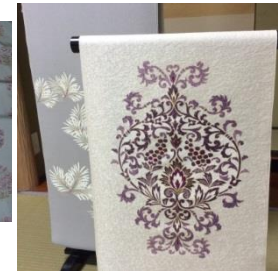
- 江戸の粋を生かした図柄と洒落た感覚に、都会的でモダンな色調と深みのある色彩。単彩のなかにも秘めた美しさと気品が特徴。

歴史

江戸時代、神田・浅草に染屋が集積し、越後屋などの呉服店が日本橋(神田紺屋町)で流行を取り入れた新しい着物づくりを始めました。その後、繁華街に呑み込まれ、きれいな水を求めて神田川をさかのぼり早稲田戸塚周辺から中井に着物関連業の工場や職人が集まってきました。これが「染めの王国・新宿」です。東京染小紋・東京手描友禅・江戸更紗に代表される伝統を守り続けています。

特徴

江戸に伝わる粋を生かした図柄と洒落た感覚に、明治以降の都会的でモダンな色調と深みのある色彩が加わり、手描き染めの伝統技術を巧みに生かして、花鳥風月を思いのままに多彩繊細に表現できることに特徴があります。構想図案から下絵、友禅さし、仕上げまで、模様師の一貫作業です。単彩のなかにも秘めた美しさを特徴とし、気品、格調高い留袖・訪問着・振袖など一品一品絵を描くようにして染めます。



問合せ先

新宿区染色協議会

〒169-0051

東京都新宿区西早稲田三丁目6番14号

電話 03-3987-0701 / FAX 03-3980-2519

URL <http://tokyo-somemono.com>

東京染小紋

(とうきょうそめこもん)

●遠目には無地。近づくと浮かび上がる繊細な柄。単色で染めあげる粹な味わい。

歴史

江戸時代、神田・浅草に染屋が集積し、越後屋などの呉服店が日本橋(神田紺屋町)で流行を取り入れた新しい着物づくりを始めました。その後、繁華街に呑み込まれ、きれいな水を求めて神田川をさかのぼり早稲田戸塚周辺から中井に着物関連業の工場や職人が集まってきました。これが「染めの王国・新宿」です。東京染小紋・東京手描友禅・江戸更紗に代表される伝統を守り続けています。

江戸時代、江戸城に登場する時の制服が【袴】です。大名を判別する為に【袴】に細かい文様を入れることになり、これが江戸小紋のルーツです。

特徴

東京染小紋には、武士の袴がルーツの「御定め小紋」と言われる『江戸小紋』と庶民の遊び心が溢れ洒落や語呂を取り入れた『いわれ小紋』があります。伊瀬型紙に彫られた細かい文様を生地に丁寧に写し取る作業は、極めて高度な技術を必要とする職人技の一つです。遠目には無地。近づくと浮かび上がるため息のするような繊細な柄が東京染小紋の真髄です。格調のある柄は「鮫柄・角通し・行儀文様等」礼装に使われる無地の一つ紋の代わりに使われています。また、東京染小紋の技法を用いながら現代的な模様・染料を用い、多色で流行を取り入れた小紋を「東京おしゃれ小紋」と呼びます。



問合せ先

新宿区染色協議会

〒169-0051

東京都新宿区西早稲田三丁目6番14号

電話 03-3987-0701 / FAX 03-3980-2519

URL <http://tokyo-somemono.com>

江戸更紗(えどさらさ)

●エキゾチックな柄文様。奥行きのある柄・落ち着いた味わい・渋みのある色調が特徴。

歴史

江戸時代、神田・浅草に染屋が集積し、越後屋などの呉服店が日本橋(神田紺屋町)で流行を取り入れた新しい着物づくりを始めました。その後、繁華街に呑み込まれ、きれいな水を求めて神田川をさかのぼり早稲田戸塚周辺から中井に着物関連業の工場や職人が集まってきました。これが「染めの王国・新宿」です。東京染小紋・東京手描友禅・江戸更紗に代表される伝統を守り続けています。

インドで発祥し、伝わってきた文様<更紗>は、ジャワでバチック染となり、日本で手描きローケツで染めた『手描き更紗』となりました。

特徴

江戸時代京都で描かれ、明治時代に京都の型友禅技法を取り入れた江戸更紗は、日本の風土と独特の美意識で発展し、異国情緒を漂わせながら、エキゾチックな柄文様をきもの柄に転用し、30枚から60枚もの伊勢型紙を使った型紙摺りの技法で江戸更紗独特の渋味を表現しています。江戸更紗は、その美しい模様の中に熟練した職人たちの技が息づいています。

問合せ先

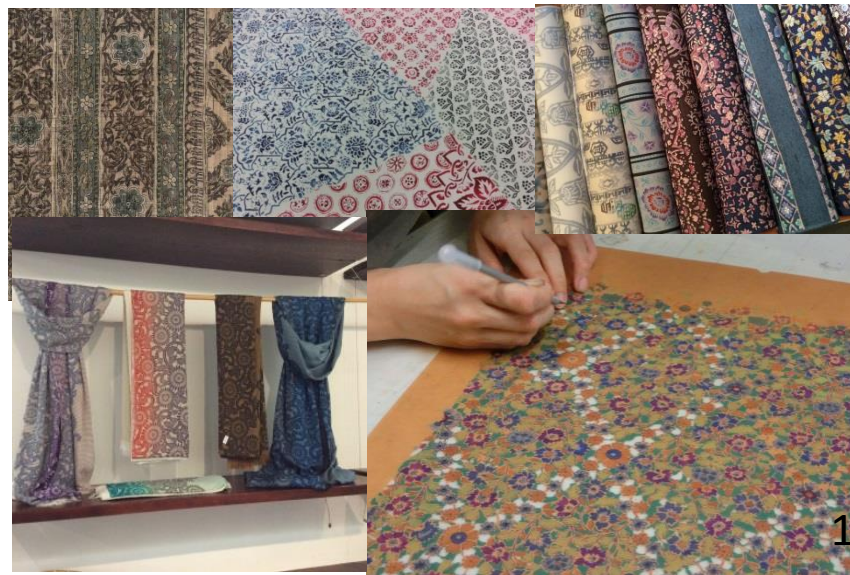
新宿区染色協議会

〒169-0051

東京都新宿区西早稲田三丁目6番14号

電話 03-3987-0701 / FAX 03-3980-2519

URL <http://tokyo-somemono.com>



十日町産振袖(とおかまちさんふりそで)

●未婚女性の第一礼装として成人式など晴れやかな場面で着用します。

歴史

十日町産地は伝統的工芸品「十日町
緋」「十日町明石ちぢみ」に代表される先
染織物が中心でしたが、昭和39年の東
京オリンピックでのコンパニオンたちの
華やかな振袖が目をつけたことや和装
の「ファッション化」「フォーマル化」に
対応するため新たに後染商品の開発に
取り組み、工場制一貫生産という他に類
例のないシステムを確立すること

で「成人式イコール振袖」という定番を
作り上げ市場の拡大に貢献しました。

特徴

振袖のほか訪問着、留袖、付下、帯など幅広い
品種の後染商品を十日町産地は生産していま
す。その技法は手描友禅、型友禅から自然素材
を活かした草木友禅、絞りは総絞り、疋田絞り、
桶絞り、辻ヶ花染、さら金箔や刺繍、印傳など多
岐にわたります。意匠も格調高い正統古典柄か
ら新感覚なモダン柄まで各社それぞれがオリジ
ナリティに富んだ商品を手掛けているのが十日
町産地の特徴です。



問合せ先

十日町織物工業協同組合

〒948-0003

新潟県十日町市本町6丁目クロス10四階

電話 025-757-9111 / FAX 025-757-9116

URL <http://www.tokamachi-ori-kumi.or.jp/>

十日町明石ちぢみ(とおかまちあかしちぢみ)

●「蝉の翅(はね)」とも呼ばれる清涼感あふれる夏向け高級着尺の代表です。

歴史

明治時代に誕生し、生産者の改良・努力や防水加工の発明により、濡れると縮むという欠点を克服し、「玉の汗にも縮まぬ明石」の名のもと発売されました。また、当時美人画で一世を風靡していた竹久夢二を起用し、コマーシャルソングとして十日町小唄を製作するなどマーケティング戦略も成功し、流行の最先端となりました。近年にも復刻生産され、現代の着物ファンにも支持されています。

特徴

強い撚りを加え、湯もみをして作り出す独特の凹凸(シボ)と、清涼感あふれるシャリツとした薄地が特徴です。薄物であるがゆえ最高級の糸が使用され、そこに高度な撚糸技術を加え、職人のプライドをかけた繊細で緻密な技術により「蝉の翅(はね)」とも呼ばれる、夏向け高級着尺となります。



問合せ先

十日町織物工業協同組合

〒948-0003

新潟県十日町市本町6丁目クロス10四階

電話 025-757-9111 / FAX 025-757-9116

URL <http://www.tokamachi-ori-kumi.or.jp/>

十日町絣(とおかまちがすり)

- 縦絣と横絣で表現する繊細な絣模様が、絹の光沢と結びつき落ち着いた風合いを出します。

歴史

十日町の織物の歴史は古く、飛鳥・天平時代の昔から自生している苧麻(ちよま、からむし)を素材とした麻布の生産が盛んに行われていました。江戸時代に入ると越後上布、または高級夏織物である越後縮の生産地として知られるようになりました。

その後、江戸時代の町民文化を背景に絹織物が広まると、越後縮の紬技法が絹織物に応用されるようになり、十日町絣が誕生しました。

特徴

先染めによって染め上げた縦糸と横糸を自在に駆使して表現する繊細な絣模様が、絹の光沢と結びついて落ち着いた風合いを出します。気軽な外出着や家庭でのおしゃれ着として愛好されています。

問合せ先

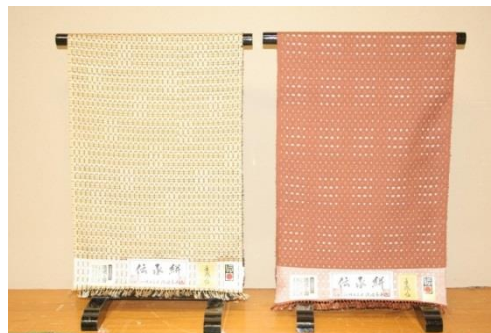
十日町織物工業協同組合

〒948-0003

新潟県十日町市本町6丁目クロス10四階

電話 025-757-9111 / FAX 025-757-9116

URL <http://www.tokamachi-origumi.or.jp/>



小千谷紬(おぢやつむぎ)

●正絹紬で古くから縞や緋、無地のほかに白紬が織られ
絹独特の光沢と風合いの良さに加え、素朴な味わいが見事に調和した織物です。

歴史

小千谷市における織物の歴史は古く、千数百年にもおよぶと言われ、江戸時代初期に夏の衣料として越後上布を改良し誕生したのが小千谷紬です。

その小千谷紬の技法を取り入れ、江戸時代中期に屑繭から糸を紡いだ絹糸で織り始められ、当初は自家用として作られていた正絹紬が小千谷紬です。

古くから養蚕が広まっていたことや湿った冬の空気が機織りに向いていたことなどから、繊細な技術を駆使した織物として大きく発展しました。

特徴

着物に仕立てた時の霞がかつたような柔らかな印象は、緯糸(よこいと)の紋様に玉繭(たままゆ)の糸の経糸(たていと)が重なることで作り出され、緯総緋(よこそうがすり)で織られる緋(かすり)や縞(しま)などの模様のほか、無地や白紬が作られています。

真綿の手紡ぎ糸のふっくらと軽くて温かみのある風合いや、絹の光沢となめらかな手触り、素朴な味わいが特徴で、着べりがしないことから気軽な和装での外出着などとして着られています。



問合せ先

小千谷織物同業協同組合

〒947-0028

新潟県小千谷市城内1-8-25

電話0258-83-2329 / FAX 0258-83-2328

URL <http://www.ojiya.or.jp>



小千谷縮(おぢやぢぢみ)

●さらりとした涼感がさわやかな、夏の美しい着物として愛され続けています。

歴史

小千谷における麻織物の歴史は古く、縄文時代後期と思われる土器に布目のあとが残されています。小千谷の気候にあった麻織物は評価が高く、将軍へ献上されていました。

江戸時代前期には、夏の衣料向けの改良が考えられ、緯糸に強い撚(よ)りをつけることで、織り上げたものに仕上げの工程で涼感を出す独特のシボと呼ばれるしわを出すことに成功しました。昔ながらの技術・技法で作られる小千谷縮は、昭和30年に国の重要無形文化財に指定されています。

また、平成21年にユネスコの無形文化遺産に登録されました。

特徴

小千谷縮は、苧麻(ちよま)と言われる麻の繊維から作られており、水分を吸いやすく、吸い込んだ水分を良く発散させるため、すぐ乾燥します。そのうえ、小千谷縮独特のシボを作っているため、肌にベタつかず夏の着物として快適です。



問合せ先

小千谷織物同業協同組合

〒947-0028

新潟県小千谷市城内1-8-25

電話 0258-83-2329 / FAX 0258-83-2328

URL <http://www.ojiya.or.jp>

塩沢紬(しおざわつむぎ)

● 緋柄がかもし出す上品な味わいと着心地の良さ

歴史

塩沢地方の織物の歴史は古く、1200年前の奈良時代、天平年間に織られた当地方の麻布が正倉院の宝物として保存されています。この麻織物(越後上布)の技術を絹織物にとり入れたものが塩沢紬で、江戸時代、明和年間頃に創織されたと伝えられています。現在では、全国でも数少ない手織製品として伝統を継承し続けています。

特徴

塩沢紬は、緋柄の上品な味わいと着心地の良さが特徴で、たて糸に主糸・玉糸を、よこ糸に真綿手紡糸を使用し、「手くり」「手摺り込み」などの伝統的手作り技法によって作り出される緋糸を、一本一本丁寧に織り上げて生まれる蚊緋・十字緋・亀甲緋などの細かい緋模様は、独特の上品さと落ち着きをかもし出します。



問合せ先

塩沢織物工業協同組合

〒949-6435

新潟県南魚沼市目来田107番地1

電話 025-782-1127 / FAX 025-782-1128

夏塩沢(なつしおざわ)

● 独特なしゃり感と透け感／涼感あふれる盛夏の織物

歴史

夏塩沢の歴史はさほど古いものではありません。生活様式の変化などにより、麻織物が衰退したことから、その技術を活かした絹織物による夏物が望まれており、およそ100年程前の明治時代に誕生したのが夏塩沢です。

特徴

夏塩沢の特徴は、精巧な拵技術と、たて糸とよこ糸に駒撚りといわれる強撚糸を使用することで生まれるしゃり感、透け感で、涼感あふれる盛夏の織物です。



問合せ先

塩沢織物工業協同組合

〒949-6435

新潟県南魚沼市目来田107番地1

電話 025-782-1127 / FAX 025-782-1128

本塩沢(ほんしおざわ)

●サラリとした着心地／にじみ出るような上品さと優雅さ

歴史

越後上布、塩沢紬とともに塩沢地方の代表的な伝統織物で、従来は「塩沢お召」の名で広く親しまれていました。起源は寛文年間に堀次郎将俊により、撚糸を用いた『しぼ』のある絁織物が考案され、近郷の婦女子に伝えられたといわれています。元治元年(1864年)の「覚」の中に運上品として「絹縮・・・」の記載があることなどより、江戸時代から当地で絹のしぼ織物が生産されていたことが文献上で確認できます。

特徴

本塩沢は生糸を使用し、よこ糸に強い撚りを掛け、織り上り後に湯もみをすることで撚りが戻り美しい「しぼ」が生まれるのが特徴で、そのサラリとした肌ざわりと、塩沢紬と同様の伝統技術によって作られる十字絁、亀甲絁などの微細な絁模様が集まって構成された柄模様が、上品さと優雅さを生み出します。

問合せ先

塩沢織物工業協同組合

〒949-6435

新潟県南魚沼市目来田107番地1

電話 025-782-1127 / FAX 025-782-1128



加賀友禅(かがゆうぜん)

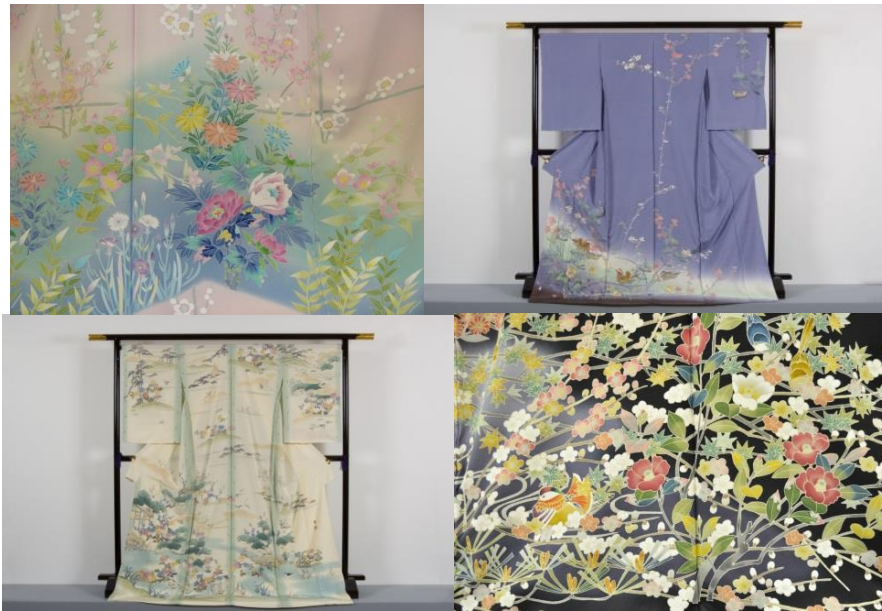
- 四季を移ろう花鳥風月を主なモチーフとし、写実的に自然美を鮮やかに描いています。

歴史

加賀友禅の始まりは、加賀独特の染め技法である「梅染(うめぞめ)」まで遡ります。「梅染」は15世紀の中頃には、すでに存在していたことが文献に記されています。梅染のほか「兼房染(けんぼうぞめ)」、「色絵紋」等の染色技法が古くから加賀に伝えられており、これらを総称して「お国染」といいました。この加賀お国染の技法を基礎に、江戸時代中期に、宮崎友禅斎が絵画調の模様染めを指導したところから、加賀友禅が確立されました。宮崎友禅斎は京都で友禅染を始めた人物で、金沢で晩年を過ごし、友禅の指導を行ったと言われています。

特徴

加賀友禅の特徴は、落ち着いたある写実的な草花模様を中心とした絵画調の柄です。加賀百万石と言われた豊かな前田家の文化的な趣味を強く反映して、渋さの中にも武家風の気品を漂わせています。



問合せ先

協同組合加賀染振興協会

〒920-0932

石川県金沢市小将町8-8加賀友禅会館内

電話 076-224-5511 / FAX 076-224-5533

URL <http://www.kagayuzen.or.jp/>

ふじやま織(ふじやまおり)

- 先に糸を染め、また糸自体も細いものを使って織ることにより、きめの細かい高品質な織物になるのが特徴。

歴史

この地に初めて織物が伝えられたという伝説は紀元前まで遡りますが、平安時代の書物においては「甲斐の布」という文字が残っています。江戸時代には本格的に生産が始まり絹織物産地として確立、「郡内縞」などの呼称で知られるようになりました。西洋の産業技術が導入された明治時代になると、技術の向上や設備の充実により羽織裏に使われた高級絹織物「甲斐絹(かいき)」として一世を風靡、全国にも名が知られるようになりました。

特徴

江戸時代の「甲斐絹」の特徴としては、先練り、甘燃り、高密度であること。時代の波により一度は表舞台から姿を消した甲斐絹でしたが、その知識と技術は先人から受け継がれ、現在のふじやま織の礎となっています。

その独特の張りを持つ風合い、深い底艶と光沢を生み出す知識や技術を最大限に活かし、現代の織物職人達の手によって、様々なアイデアから創造された高品質の製品が生み出されています。



問合せ先

富士吉田織物協同組合

〒403-0005

山梨県富士吉田市上吉田1401-4

電話 0555-22-2164 / FAX 0555-24-7181

URL <http://fujiyama-tex.com/>

甲斐絹(かいき)

●独特の光沢や風合いで江戸時代より人々の心をとらえた『甲斐絹(かいき)』がルーツ。

歴史

甲斐絹は、古くは、平安時代の法令集「延喜式」に甲斐の国は布をもって納めるよう記されており、その後、南蛮貿易でもたらされた絹により、江戸時代には絹織物が盛んになり、明治時代になって「甲斐絹」と呼ばれるようになりました。



特徴

山梨県の郡内地域(富士吉田市、西桂町、都留市、大月市、上野原市)は織物の産地であり、産地のシンボルとして甲斐絹が知られていますが、現在でも、甲斐絹の伝統技術をしっかりと受け継ぎ、『先染め・細番手・高密度』の技術による織物を得意とする全国でも有数の高級織物産地となっています。国産ネクタイの4割はこの郡内地域で生産されています。



問合せ先

西桂織物工業協同組合

〒403-0022

山梨県南都留郡西桂町小沼1593-1

電話 0555-25-2406 / FAX 0555-25-3723

URL <http://nishikatsuraorimono.com/>



岡谷絹(おかやぎぬ)

●シルクの都 ”おかや”によみがえる 美しき絹織物

歴史

岡谷では19世紀の後半、国の殖産興業策として製糸業が奨励されると、いち早くフランス式繰糸法とイタリア式繰糸法を折衷した「諏訪式繰糸機」を開発しました。そして日本一の製糸業地に発展し、「シルク岡谷」は世界に響き渡りました。生糸は日本の主要な輸出品として外貨を獲得し、明治以降、日本の近代化に大きく貢献しました。

現在、その技術と歴史は受け継がれ、岡谷蚕糸博物館に併設する宮坂製糸所で生産した生糸をメイン素材とする手織りの絹製品が、新たな名産品として国内はもとより、海外でも高い評価を得ています。

特徴

岡谷の絹製品は、煌びやかな派手さはないものの、日本の伝統的な美的精神を表す”侘び・寂び”にも通じる魅力があり、その落ち着いた美しさは、人々の心を魅了しています。



問合せ先

岡谷絹工房

〒394-0027

長野県岡谷市中央町1-13-17

旧山一林組事務所内1階

電話 0266-24-2245 / FAX 0266-24-2245

伊那紬(いなつむぎ)

●駒ヶ根の美しい自然を織り込んだやわらかい風合いが特徴

歴史

伊那紬の産地である伊那谷では、平安時代から養蚕が行われ、17世紀頃までは紬や真綿にした自家用衣料として利用されていました。18世紀に入ると、生糸の国内需要が高まり、伊那谷産の生糸も京都西陣へ出荷されるなど商品価値が高まりました。良質な伊那谷の生糸を使い、紬糸、山繭糸、絹糸、手引糸等、豊富な素材と草木染料を駆使して織られる伊那紬は、上田紬や松本紬、飯田紬などとともに総括して「信州紬」と呼ばれます。昭和50年には伝統的工芸品として国の指定を受けました。

問合せ先

久保田染色工業株式会社

〒399-4106

長野県駒ヶ根市東町2-29

電話 0265-83-2202 / FAX 0265-83-2204

E-mail inatumugi@knh.biglobe.ne.jp

特徴

多彩な糸の組み合わせにより手織され、素朴な縞、格子模様を特徴とします。現在、唯一の機屋である久保田染色(株)では、糸作りから染め、機織りまでを一貫して自社で行っています。染めには地元でとれる樹木や植物を使用し、樹皮や幹材などから染液を煎じ出し、昔ながらの手染めの方法と技術で染めています。草木染めならではの、自然のやわらかい色合いが魅力です。織り上げたきものは、軽くやわらかい手触りと、素朴でしっとりとした風合いが特徴です。



浜ちりめん(はまちりめん)

●100%生糸を使用した絹織物で、強撚糸を用いたシボの高い重目の無地織物で世界でも最高峰の織物のひとつとされています。

歴史

北近江(湖北地方)における絹織物の歴史は大変古く、記録によると、すでに和銅年間(708年～)に「綾錦(あやにしき)」という絹生地が織られていました。その後、「あしぎぬ」「浜ぎぬ」として織り継がれてきました。

江戸時代になり、宝暦2年(1752年)に、中村林助、乾(いぬい)庄九郎の二人の献身的な努力によって、「浜ちりめん」が創り出されました。

秀吉公から江戸期の天領へ、そして彦根藩に領主が移っても変わらぬ手厚い保護を受けて繁栄し、現在でも長浜の伝統産業として受け継がれ、発展を続けています。

特徴

浜ちりめんは「シボ」と呼ばれる、表面に凹凸模様のある絹織物です。シボは生地美しい光沢となめらかな肌触り、染色の染まりやすさを生み出します。浜ちりめんは無地ちりめんとして出荷され、主に着物として仕立てられています。そのため広く一般には知られていませんが、加賀友禅や京友禅にも使われる最高級品なのです。絵画で言うと、キャンバスを作っている訳です。純生糸100%を使う浜ちりめんの一つの反物には約3000個分の繭(まゆ)が使われ、製品となるまでには約2ヶ月を要します。



問合せ先

浜縮緬工業協同組合

〒526-0061

滋賀県長浜市祇園町871番地

電話 0749-62-4011 / FAX 0749-65-2695

URL <http://www.hamachirimén.jp/index.html>

西陣織(にしじんおり)

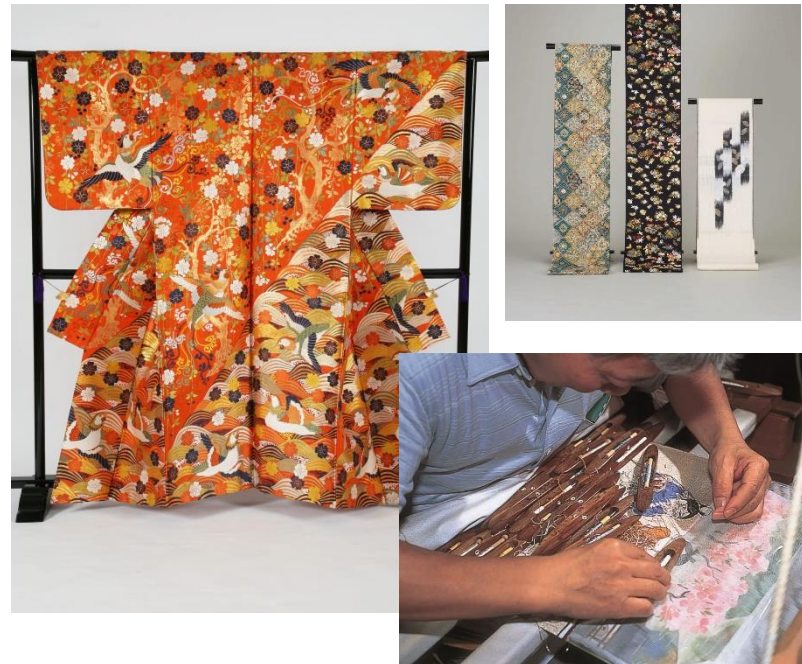
●多色の糸を使う紋織物は絢爛豪華な糸使い紋様の精緻さを誇ります

歴史

西陣という名は、室町時代の応仁の乱の時、西軍が本陣とした場所に、乱の後、職人が集まって織物をしたことから付けられました。織物の歴史としては、平安時代以前に秦氏によってもたらされた織技術にまで遡ることができます。西陣織は宮廷文化を中心に、織文化の担い手として発展してきました。

特徴

西陣織の特徴は、「多くの品種を少量ずつ作る方式をもとにした、先染めの紋織物」にあります。綴(つづれ)、錦、緞子(どんす)、朱珍(しゅちん)、緋、紬等、多くの種類の絹織物が作られています。特に多色の糸を使う紋織物は絢爛豪華な糸使い紋様の精緻さを誇ります。



問合せ先

西陣織工業組合

〒602-8216

京都府 京都市上京区堀川通今出川南入堅門前町414

電話 075-432-6131 / FAX 075-414-1521

URL <http://www.nishijin.or.jp/>

京鹿の子絞(きょうかのこしぼり)

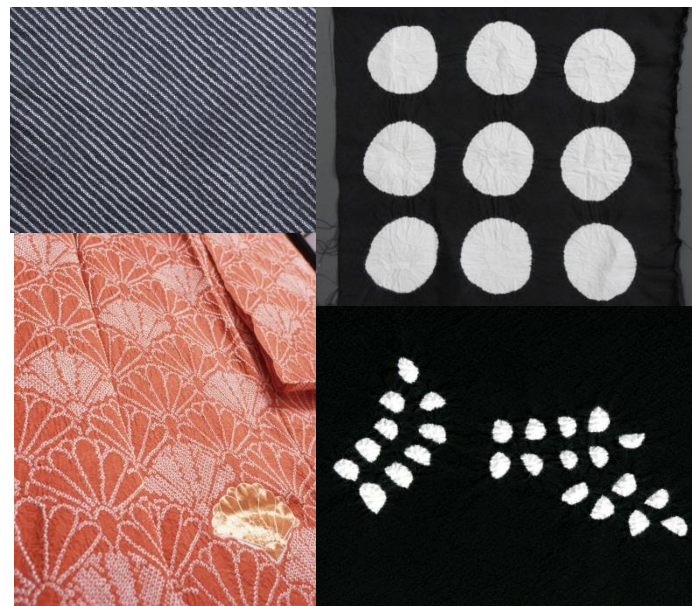
- 京都ならではの高度な技術を使って産み出された絞り製品の総称が「京鹿の子絞」です

歴史

絞り染めは、日本では千数百年も前から行われており、宮廷衣装の紋様表現として用いられてきました。括(くく)りの模様が子鹿の斑点に似ているところから「鹿の子絞り」と言われます。室町時代から江戸時代初期にかけて、辻が花染として盛んに行われるようになり、江戸時代中期には、鹿の子絞りの全盛期を迎えました。その後も手先の技は着実に受け継がれて来ています。

特徴

絞り染めの中でも鹿の子と言われる疋田絞(ひったしぼり)、一目絞(ひとめしぼり)の、その括り粒の精緻さや、括りによる独特の立体感の表現は、他に類のないものです。この他、それぞれの括り技法の持つ表現力を組み合わせて、模様が表現されています。



問合せ先

京鹿の子絞振興協同組合

〒604-8225

京都府 京都市中京区西洞院四条上る蟻螂山町481

電話 075-255-0469 / FAX 075-255-4690

URL <http://www.kyokanoko-shibori.or.jp/>

京友禅(きょうゆうぜん)

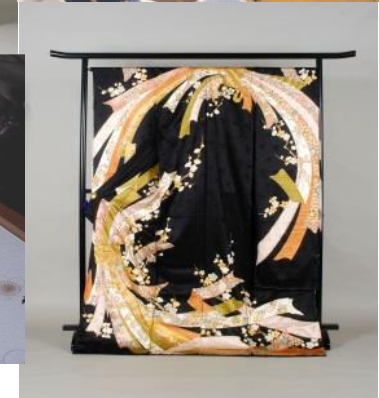
●京の匠の手仕事による世界で類のない色彩豊かで絵画的な模様染

歴史

染色技法は8世紀から伝わり、手描友禅は江戸時代に京都の絵師宮崎友禅斎によって確立されたと伝えられています。扇絵師として人気の高かった宮崎友禅斎が、自分の画風をデザインに取り入れ、模様染めの分野に生かしたことで「友禅染め」が生まれました。色数が多く絵画調の模様を着物に染める友禅染は、町人文化の栄えた江戸時代の中期に盛んに行われるようになりました。明治時代には、型紙によって友禅模様を染める「写し友禅染め」が開発されました。

特徴

花鳥山水等を写した京友禅は、日本の着物の代名詞になっているといっても言い過ぎではないでしょう。多くの色を使いながらも、気高く奥ゆかしい京友禅の色柄には、京都千年の歴史が育んだ、美しい感覚が息づいています。



問合せ先

京友禅協同組合連合会

〒604-8225

京都府 京都市中京区西洞院四条上る蟻螂山町481

京染会館内

電話 075-255-4496 / FAX 075-255-4499

URL <http://www.kyosenren.or.jp/>

丹後ちりめん(たんごちりめん)

- 生地にシボと呼ばれる凸凹を施し、一般絹織物には出せないしなやかな肌触りや染めつけの良さが特徴。

歴史

丹後地方では、少なくとも奈良時代から絹の生産が行われており、正倉院宝物には丹後国竹野郡から調貢された絁(あしぎぬ)が残されている。

ちりめん技術が導入されたのは享保5年(1720年)から享保7年(1722年)にかけてであり、加悦谷地方では手米屋小右衛門、山本屋佐兵衛、木綿屋六右衛門らが故郷に技術を持ち帰り、新興ちりめん産地が大きく発展した。

特徴

丹後ちりめんの特徴は、1mあたり3,000回程度の強い撚りをかけたヨコ糸を使って織り、その後、精練することにより、糸が収縮し、ヨコ糸の撚りがもどり、生地全面にシボと呼ばれる凸凹が生まれ、一般の絹織物には出せないしなやかな肌触りや染めつけの良さを作り上げる。丹後ちりめんは、シボがあることにより、シワがよりにくく、しなやかな風合いに優れ、凸凹の乱反射によって染め上がりの色合いが豊かな、しかも深みのある色を醸し出すことができます。ちりめんの代表的存在である「丹後ちりめん」は、このシボが最大の特徴です。

問合せ先

丹後織物工業組合

〒629-2502

京都府京丹後市大宮町河辺3188番地

電話 0772-68-5211 / FAX 0772-68-5300

URL <http://www.tanko.or.jp/>



ポリエステルちりめん(ぽりえすてるちりめん)

●生地にシボと呼ばれる凸凹を施し、伸縮を抑え、しなやかな肌触りや染めつけの良さが特徴。

歴史

昭和30年代から全国的に洋装生活スタイルが取り入れられたため、従来より和装生地で活用されていた絹織物では縮むため洋装には不向きであった。

その当時、最先端の糸であったポリエステルは、熱によってセットができ、縮みの問題が解決されるため、丹後産地の服地生地への分野へ広がった。

特徴

古来より伝承されてきた丹後独自の絹織物の技術を活用。

丹後ちりめんの特徴でもある、しなやかで光沢のある風合いを出し、丹後ちりめんの特徴であるシボを残しながら生地を作り上げる。

エレガンスなドレープ性と速乾性を兼ね備え、シワになりにくく、簡単に洗濯でき、乾きが速いため、旅装などにも重宝されます。

問合せ先

丹後織物工業組合

〒629-2502

京都府京丹後市大宮町河辺3188番地

電話 0772-68-5211 / FAX 0772-68-5300

URL <http://www.tanko.or.jp/>



本場大島紬(ほんばおおしまつむぎ)

●長い歴史と伝統を誇り、世界一精緻な絣といわれる織物です。

歴史

その起源は1300年以前にさかのぼり、わが国において最も長い歴史と伝統をもつ織物です。鹿児島では奈良以前から養蚕が行われ手紡糸で紬が生産され、その染色方法も天智天皇(661年)の時代からの古代植物染色の技法であり、現在車輪梅染(テーチ木)及び藍染として伝えられております。また、明治40年頃から締機による織締絣の方法を採用するようになり、世界に類をみない本場大島紬独特の精緻な絣模様ができるようになりました。



特徴

織細でしかも鮮やかな独特の美しい絣模様、軽く、しわになりにくく、着くずれしないなどの特徴があります。また、伝統的な泥大島や、泥藍大島といったものから、新しい色大島や白大島など、色・柄・風合いなど豊かなバリエーションをもつため、着用範囲も広がり、色々な場面で着られるようになっています。



本場大島紬染色工程
～おしむぎ～
染色

泥染

織締された絣や地金を染める。伝統技法のシクナ藍染から、藍染、やまももなどの植物染色、そして色調も多彩な合成染料まで、ファッションブルに染上げられます。

問合せ先

本場大島紬織物協同組合

〒891-0123

鹿児島県鹿児島市卸本町4番地7

電話 099-204-7550 / FAX 099-204-7551

URL <http://oshimatsumugi.com/>

本場奄美大島紬(ほんばあまみおおしまつむぎ)

●精巧な絣織と泥染めが生み出す独特の風合いが特徴の織物です。

歴史

奄美における大島紬の始まりは、7世紀頃に遡ります。産地が形成されたのは18世紀初期のことで、その後、技法は鹿児島にも伝わりました。絣模様は締め機(しめはた)という独特の機を用いて作られます。糸を染める「泥染め」の技法は特に有名です。

特徴

本場奄美大島紬は、絹100%、先染め、手織りで絣合わせをして織上げたものです。

軽くて暖かく着崩れせず、着込めば着込むほど肌になじむ着心地の良さと、他に類を見ないほど精巧な絣(かすり)織と泥染めが生み出す独特の風合いがあり、着物の最高級品として位置づけられております。



問合せ先

本場奄美大島紬協同組合

〒894-0026

鹿児島県奄美市名瀬港町15番1号

電話0997-52-3411 / FAX 0997-53-8255

URL <https://sites.google.com/site/honbaamamioshimatsumugi/>

本場奄美大島紬(ほんばあまみおおしまつむぎ)

●絹糸100%、先染め手織りにより生み出される、歴史と文化がたたく最高級絹織物

歴史

大島紬の歴史は古く、その起源は1300年以前にさかのぼり、我が国染色織物のもっとも古い伝統を持つものといわれています。初期の大島紬は、手紬糸を用いて地機で織られ、島民の普段着として広く着用されていたものでしたが、薩摩藩の統制下時代から半への貢物として作られるようになりました。明治時代以降、技術革新が進み、より繊細で高度な技術を用いた織物へと発展し、大島紬の古代染色技術と民芸品的古典の渋みは高く評価され、昭和50年には国の伝統的工艺品にも指定されました。

特徴

本場奄美大島紬の特徴としてまず挙げられるのが、絹糸100%で織られ、かつ、先染めによる細かい縞(かすり)で模様を表現していることです。縞織物の中でも最も細かい縞であり、経(たて)糸と緯(よこ)糸の縞を正確に合わせた唯一の織物です。また、テーチ木(シャリンバイ)と泥を用いた独自の染色法による大島紬特有の黒褐色としなやかな風合い、着心地の軽さなども大島紬の特徴です。

問合せ先

龍郷町産業振興課

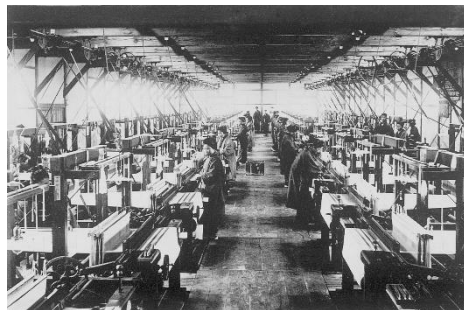
〒894-0192

鹿児島県大島郡龍郷町110番地

電話 0997-62-3111 / FAX 0997-62-2535

URL <http://www.town.tatsugo.lg.jp/>





編集/発行 シルクのまちづくり市区町村協議会
平成28年3月 発行
平成31年3月 加筆修正

【このパンフレットに関するお問い合わせ先】
平成30年度シルクのまちづくり市区町村協議会事務局
(鶴岡市商工観光部商工課)

〒997-8601 山形県鶴岡市馬場町9-25
TEL: 0235-25-2111 / FAX: 0235-25-7111
メール: shoko@city.tsuruoka.yamagata.jp

